

減少する若年層 地域への影響は

経済の高度成長期以降、地域社会、就業構造、そして市民意識の大きな変化に伴い、新たに消防団員として参加する若年層が年々減少しています。消防団員の年齢構成は、かつて比較的若年層が中心でしたが、近年、30代未満の団員の割合が減少する一方、40代や50代以上の割合が増加するなど、高齢化が進行しています。

また、団員のサラリーマン化も進み、消防活動と仕事の両立が困難なケースも見られます。消防団員の減少は、私たちの安心安全な生活に影響を与えるとともに、地域防災力の低下へ

つながることが心配されています。しかし、いつどのような状況で発生するか分からない大規模災害や住宅火災、さらには、国民保護法による緊急事態への対応など、消防団員の役割がますます重要になってきていることも事実です。

市では随時団員を募集しています。興味をお持ちの方は、市役所総務課または、消防署までご連絡ください。

問 伊奈庁舎総務課 58・2111（内線1212）
問 つくばみらい消防署 58・0111

消防団活動を通じて

消防団員は、消防団におけるさまざまな活動を通じて、たくさんの仲間に出会います。

団員の中には、「中学校以来、会うことのなかった仲間と再会できて嬉しい」「同年代の方が多く、地域の新しい仲間ができたことは一生の宝」といった声も聞かれます。

また、ご家族の方からは「消防団に入ってから人間がひとまわり大きく成長した」「地域の

ことが良く分かってきた」と喜ばれています。

消防技術の習得以外において、団体活動を通して素晴らしい仲間と出会うことも、団員にとって一生の財産となっています。

さらに、団員同士のつながりはもちろんのこと、団員の家族同士が集まってバーベキューをしたりと、より深いつながりが生まれています。

地域を守る使命感

災害発生のお知らせを受け、その現場に飛び込んでいくということは、自らの命を危険にさらすことになります。

団員たちは、日ごろの厳しい訓練があるからこそ、自分の身をかえりみず消防活動ができるのです。消防団員は特別職の地方公務員となるため、消防団

の公務中にけがをした場合などは、公務災害補償があります。また、活動に対して少額ではありますが、報酬や出動手当が市から支給されます。このような厚生制度があるとはいうものの、自らの命を危険にさらすことは簡単にできることではありません。危険をかえりみず消防活動

を行えるのは、「市民の生命と財産は自分たちで守る」という消防団員の使命感に尽きるといえます。そして、その使命感は決して消防団員だけのものではなく、この地域に住み、この地域で働く私たち一人ひとりが持つことが大切です。

私たちは、もう一度地域の安全を考えるため、消防団活動に目を向けることが必要ではないでしょうか。

人と人とのつながりが築ける消防団

interview

インタビュー

自動車整備士（城中）
おおせ 剛彦さん（32歳）
普段は、自動車整備工場を営む父と一緒に勤務し、緊急時は消防団という二足のわらじを履きこなす。
家庭では3人の子を持つ優しいパパでもある。



5年前、地元の消防団関係者からの誘いが入団のきっかけでした。消防団として活躍する父

の姿を見ていたことで、入団は自然なことでした。これまで、地域社会の活動にあまり関わらず生活してきたこともあり、自分の住むまちに対して、自分が何をしたいかなければならないかと考えたこともなく、初めは少し戸惑いもありました。しかし、一生住むまちだと覚悟して、自分の住むまちに少しでも関わっていかうという思いがあり、消防団に入団することを決めました。

入団すると、一つ一つの行動に統率のとれた消防団を目標の当たりになして、驚きと同時に、自分が消防団活動を通じていくことに不安を感じました。しかし、初めて火災に出動した時、実際に自分たちが、自分のまちの災害に対して行動していかなければならないという思いが、緊張感とともに実感としてわき上がってきました。また、それまで漠然と見てきた消防団が、日々の活動によって支えられていることに実感を持ちました。

仕事の関係で一度ふるさとを離れ、あらためて人と人とのつながりを気づかせてくれた消防団には感謝の気持ちがあり、今後は消防団活動に「人と人とのつながり」を持って、お互い助け合っていくという精神で続けていこうと思っています。